

カザフスタンのコイン — 独自通貨導入から現在まで —

岡 奈津子

カザフスタンの通貨テンゲ

(tenge) は今年で誕生二〇周年を迎える。一九九〇年代初頭のハイパーインフレで、テンゲの交換レートは導入後すぐに急落を始め、通貨としての地位は不安定であった。広告の商品やレストランのメニューは、しばしばテンゲではなく「基準単位」(米ドル)で表示されていた。小金がたまると、庶民はテンゲをドルに交換してタンス預金にしたものである。しかし現在では、好調なカザフスタン経済を背景にテンゲはおおむね安定しており、国民のあいだでの信頼度も高い。

本稿では、独自通貨導入から現在まで、カザフスタンでどのようなコインが使われてきたのかを、筆者の手元に残る新旧の硬貨の写真とともに、簡単に振り返ってみる。

● 独自通貨の導入

一九九一年一二月に独立したカザフスタンは、その後もロシアを中心とするルーブル通貨圏にとどまり、ソ連時代のルーブルを使っていた。独自通貨テンゲが導入されたのは一九九三年一月一日のことだ。これに先立つ一九九三年七月、ロシアが新紙幣を導入し旧ルーブル札を使用停止としたため、使えなくなった旧ルーブル札がカザフスタンに大量に持ち込まれる事態となった。このことは、一九九二年の価格自由化によって引き起こされたインフレをさらに悪化させた。カザフスタンはそれ以前からルーブル圏離脱の準備をしていたが、このロシアの独断的措施が決定的となり独自通貨導入に踏み切ったのである。導入時の交換レートは一米ドル〓四・六八テンゲだったが、激しいインフレ

によりテンゲはまたたく間に急落した。

カザフスタン独立後初の紙幣はイギリスで印刷されたが、コインの製造は国内で行われた。北部のウスチ・カメノゴルスク市にあるウルバ冶金工場内に設立された造幣所(カザフスタン造幣局の前身)で、テンゲ硬貨と、補助単位であるティイン(tyn、一〇〇ティイン=一テンゲ)硬貨が製造されたのである。

テンゲ硬貨(額面は一、三、五、一〇、二〇テンゲ。写真①と②は三、二〇テンゲ硬貨)の素材は洋白(銅、亜鉛、ニッケルの合金)で、一、三、五テンゲ硬貨の表面は、一六角形の装飾のなかに額面と製造年が彫っており、さらに「カザフスタン国立銀行」の略称「QUB」がごく小さな文字で記されている。裏面はそれぞれ異

なる図柄(順に羊、狼、ヒョウの神話上の姿)を「カザフスタン共和国」の文字が取り囲んでいる。

一〇テンゲ硬貨と二〇テンゲ硬貨は、一、三、五テンゲ硬貨に比べ一回りも二回りもサイズが大きい。一〇テンゲ硬貨は五〇〇円玉くらいの大きさだが、二〇テンゲは直径三一ミリもあってずっしりと重い。いずれも表面に国章と額面、国名が記されている。裏面のデザインは、製造年と、一〇テンゲは神話上の鳥、二〇テンゲはアル・フアラビー(九世紀末〜一〇世紀初頭の中東で活躍した哲学者。カザフスタン南部の生まれであることから、同国史上の偉人として位置づけられている)が彫刻されている。記念コインを除けば、人物が描かれたコインは一九九三年にデザインされた二〇テンゲ硬貨だけである。

ちなみに独自通貨導入時に印刷された紙幣には、額面が一、三、五、一〇、二〇テンゲのものもあったため、同じ額面の紙幣とコインが同時に流通していたことになる。

ティイン硬貨(額面は二、五、一〇、二〇、五〇ティイン、写真③は五、五〇ティイン硬貨)は黄



写真①

写真②

写真③



写真④

写真⑤

筆者撮影

銅製で、いずれも表面に八角形の模様が施され、そのなかに額面とQUBの文字が記されている。周りはカザフ民族の伝統的装飾模様が配置され、下に鋳造年、裏面には国章と国名が彫られている。しかし物価の急上昇とともに、まもなくティン硬貨はほとんど使われなくなった。

なお導入直後は必要な数のコイ

ンの鋳造が間に合わなかったのか、あるいは予算不足が理由だったのか、硬貨を模したデザインの新ティン紙幣も印刷された。パステル調のカラフルな色彩で、小さいだけでなく横幅が短く、ぐりした形なので、まるでおもちゃの紙幣のようにみえる。

●現在流通している「コイン」

現在使われているのは、一、二、五、一〇、二〇、五〇、一〇〇テン

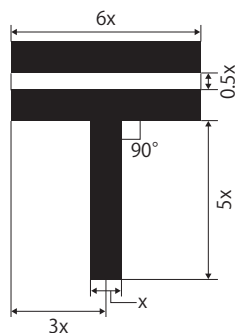
ゲ硬貨で、一九九七年のデザインである（一〇〇テンゲ硬貨は二〇〇二年、二テンゲ硬貨は二〇〇五年に鋳造開始）（写真④と⑤は二〇、一〇〇テンゲ硬貨）。材質はいずれも銅、亜鉛、ニッケルの合金だが、一〇一〇テンゲ硬貨が白黄色、二〇、五〇テンゲ硬貨が白色で、一〇〇テンゲ硬貨には両方の色が使われている。

デザインはそれまでのものに比べるとシンプルだ。一〇〇テンゲ硬貨の表面は、額面の周囲に三

つの伝統的模様が施され、上部に小さな八角形の装飾、左下にQUBの文字がみえる。他の硬貨も基本的に同じデザインだが、一〇、二〇、五〇テンゲ硬貨では模様が下に一つ、一、二、五テンゲ硬貨では八角形の装飾はなく模様が左右に二つ配置されている。裏面はすべて国章、国名と鋳造年で統一されている。

二〇一三年四月現在の交換レートでは、一〇〇テンゲは約六六円（二米ドル＝一五〇テンゲ）で、コインを使う機会はそれなりに多い。とくにバスや路面電車など、公共交通機関での支払いには硬貨は必須だ。運転手や車掌に料金を手渡す際には、できるだけおつりがないようにするのがマナーである。なお一〇年ほど前までは、店で買い物をすると、細かいつり銭代わりにガムや飴、マッチなどをよく渡されたが、最近では、とくに大手スーパーのレジは少額硬貨

図1



を十分用意しており、つり銭の「現物払い」をみかけることは少なくなってきた。

余談だが二〇〇六年、カザフスタン中央銀行がテンゲの通貨記号を公募したところ、多くの案が寄せられた。その中から厳選されたデザインは翌二〇〇七年四月、正式に採用されたが、それが日本の郵便マークにそっくりなのだ（図1）。公募結果が発表され、提案者が懸賞金を受け取ったあとにそのことが指摘されたため、物議をかもしたそうである。それが影響したのかどうかはわからないが、このテンゲ記号はあまり認知されていない。実は、現地に暮らしたことがある筆者も拙稿の準備中に初めて知ったのだが、自分で撮影した両替所の為替レートの写真を見ると、確かに「T」が使われていた。カザフスタンを旅行する機会があれば、ぜひチェックしてみてほしい。

（おか なつこ／アジア経済研究所 中東研究グループ）

《参考URL》

カザフスタン造幣局 <http://www.kmd.kz/eng/>